

真言密教の衆生観

—「凡聖六大」を中心に—

土居 夏樹（高野山大学）

弘法大師空海（774-835）の即身成仏思想において、地水火風空の五大と識大からなる〈六大〉の教義が重要な位置を占めていることは言を俟たない。『即身成仏義』では、〈六大〉を、『大日経』「具縁品」に説かれる大日如来の〈さとり〉の内実そのものと解釈する。また、法身から六道の衆生、さらには非情（非生物）にいたるまでのすべての物ごとは、この〈六大〉から成り立っているとし、そのために〈六大〉は〈法界体性〉と呼ばれる、としている。

このように『即身成仏義』では、〈六大〉が仏と衆生とに共通する本質・本性と位置付けられている。衆生は仏と同じく〈六大〉を本性とするから即身成仏することができる。これこそが空海の即身成仏思想の根幹にほかならない。

ところで、空海以後に展開した真言密教の教学には、この〈六大〉そのものに、凡聖や麁細といった違いがあるのかどうかについての教理問答（論義）が伝わっている。「凡聖六大同異」（以下、「凡聖六大」）などと呼ばれるこの論義では、衆生と仏の〈六大〉は同じなのか異なるのかが問題とされ、〈六大〉そのものに衆生や仏といった違いが存在する、と結論付けている。

しかしながら、衆生には衆生の、仏には仏の〈六大〉があって、それぞれ異なっているのであれば、衆生はその本性において衆生である、ということになる。衆生は、たとえそのあり様がどのようなようであったとしても、その本性が仏と不二平等、すなわち〈生仏不二〉であるから成仏することができる。したがって、〈六大〉そのものに凡聖や麁細といった違いがあるならば、衆生は成仏することが出来ないことになるのではないか。

「凡聖六大」で、凡聖・麁細といった違いが〈六大〉そのものに存在する、と結論する理由は、顕教における〈一理法性〉の教義との違いを示すためである。すなわち、〈六大〉そのものに凡聖の違いがあるという見解は、顕教とは異なる〈多法界〉の立場からの主張なのである。それでは、その顕教と異なる〈多法界〉の立場では、衆生の成仏はどのように説明されるのであろうか。

この〈多法界〉における成仏論として示されるのが、〈三密行〉における〈入我我入〉である。〈入我我入〉では、仏が行者に入り込み、行者が仏に入り込み、両者は不二一体となる。つまり「凡聖六大」での結論は、この三密行における〈入我我入〉を視野に入れたものと考えられるのである。

顕教の〈一理法性〉とは異なる真言密教独自の〈多法界〉の立場では、衆生には衆生の、仏には仏の〈六大〉があるとされる。このことは言い換えるならば、真言密教における〈生仏不二〉とは、〈入我我入〉という〈三密行〉の場面で論じられるものである、ということにほかならない。

（本文：1110 文字）

キーワード：凡聖六大同異、多法界、入我我入